

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463580

研究課題名(和文) 特別支援学校において医療的ケアを担う看護師の専門性を高める支援プログラムの構築

研究課題名(英文) Establishment of Support Program for Enhancing Expertise of Nurses Responsible for Medical Care in Special Schools

研究代表者

泊 祐子 (Tomari, Yuko)

大阪医科大学・看護学部・教授

研究者番号：60197910

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：学校に勤務する看護師が重症児の看護に精通し、学校において専門性の高い看護の展開ができる支援プログラムを構築することを目的とする。方法は、学校に勤務する看護師への面接やグループ討論の内容分析し、ニーズの把握と必要な支援内容を精選する。

それらの結果をもとに支援プログラム試案を作成し、研究会を開催した。学校看護師の支援には、重症児の変化する体調をアセスメントする自信をつけること、多様な要求のある保護者への対応スキルを身につけるために看護師同士の交流会が効果的であったといえる。

研究成果の概要(英文)：Purpose: Establish a support program for nurses working for schools to become well-versed in nursing of children with serious symptoms making them possible to provide nursing with highly specialized knowledge in schools. Method: Analyze results of interview and group discussions for nurses working for schools and carefully select required support contents based on recognition of needs.

Upon preparation of a draft proposal of support program based on those results, a study group was established. In order to support school nurses, it was believed to be effective for them to develop confidence for assessment of varying health condition of children with serious symptoms as well as to have exchange between nurses in order to improve skills to cope with children's parents having various requests.

研究分野：小児看護学

キーワード：医療的ケア 学校看護師 支援プログラム

1. 研究開始当初の背景

学校に看護師が配置されて 10 年近く経過するが、当初は、看護師だけでなく、教員や受け入れる学校自体にも混乱や戸惑いが生じていた。学校という教育の場で働きはじめた看護師は、今までの病院との違いに戸惑い、混乱し、看護のアイデンティティが揺らぐような体験をしていた。著者らは、学校で看護師が活動しやすい基盤づくりの必要性があると考え、「医療的ケアに携わる看護師の学校での活動基盤づくりと専門性を高める支援モデルの作成(研課題番号(22592558))」に取り組んだ結果、把握した課題は、下記の 4 つであった。

障がい児看護への専門的知識の不足からの技術への自信のなさ

学習・研修の機会のなさやそれに関する情報不足

医療的ケアに携わっている看護師同士の出会う機会のなさ

医療職がない学校での身体アセスメントや緊急時の判断などの困難

これらを基に、特別支援学校において医療的ケアを担う看護師への支援モデルを現在作成している。

一方「介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律」の成立(平成 24 年 4 月から施行)にて、教員による医療的ケアの実施が法律で認められた。そのため指導的立場の看護師の役割に伴う課題も新たに生じる上に、ヒヤリハットへの検討、救急時の対応などが加わり、以前より指摘されているように業務内容は量的質的にもますます責任が増加すると考えられる。しかし、学校で勤務する看護師の責任の重さに対して、身分保障がないことや、会議に出席したくても勤務時間の制限などの問題等があった。雇用形態については、9 割以上が非常勤職員で占め、常勤・正規職員は 1 割にも満たない。

2. 研究の目的

学校に勤務する看護師が重症児の看護に精通し、学校において専門性の高い看護の展開ができる支援プログラムを構築する。

3. 研究の方法

1) 設置主体(地方自治体)の違いによる医療的ケアへの担任教員と看護師の役割分担を文献検討する。

2) 看護師の学校での看護実践について、グループ面接を行う。

3) 支援プログラムを展開する方法を確認する。

4. 研究成果

1) 「設置主体(地方自治体)の違いによる医療的ケアへの担任教員及び看護師の役割分担」

地域の広さ(通学の距離)により医療的ケアを必要とする児童生徒の通学は、訪問学級が主になり、通学時は保護者が同行している場合がほとんどであったこと、通学の場合にも自治体により呼吸器を装着している場合には、保護者の付き添いが必要となったこと、自治体により、担任教員が担当児童生徒の医療的ケアを実施している場合としていない場合があり、それによって看護師の役割の範囲が異なっていた。また、学校に一人は、常勤雇用の看護師を置いている場合とすべて非常勤の場合とで、看護師の役割が大きく違い、困難の内容が異なった。

そこで、研修会の募集は近県数件に募集をして、異なる自治体での討論ができるように計画することにした。

2) 看護師が学校での看護ケアに困難を感じている内容

(1) 学習場面での課題

中堅看護師 10 人を対象に聞き取りを行った結果、学習場面での担任との連携が重要であったと実感し、学校生活における危機管理、授業に臨めるように体調を管理する、安定した体調で成長を支えるなどの看護師の役割の要素が見出された。

(2) 重症児をアセスメントする問題

「学校において看護師が医療依存度の高い子どもへのケアに感じる困難」に関する討論を分析した。対象者は 30 人であった。

分析視点は、「子どもの体調の変化」「変化する身体のアセスメント」「子どもへの適切なケアの実施」「子どもにかかわる教員・親」とした。

その結果、6 カテゴリーが抽出された。

“在学中に身体状況が変化する子ども”は、学校入学直後は看護師が濃厚にかかわることが多いが、体調の安定と共に担任にケアを委譲していく。しかし、中学から高等部になるとだんだん悪くなっていく。成長に合わせて身体状態は、低下、悪化していく(側彎や呼吸・消化器機能の衰え)児の体調をアセスメントして援助しているが、親や教員は現時点での児の衰えに目が向きにくく、食事量の維持や自分で呼吸ができることに目が行きがちであるなどがあがった。

“変化する子どもの身体への看護師の認識と教員の対応のずれ”は、子どもの肺の線維化が進行して、呼吸器装着が必要となった時に、母親に学校内待機をしてもらうかどうか問題になる。

看護師は呼吸器をつけた方が安全で、つけ

ないときが危ないと思うが考え方が異なることなどである。

“重症心身障がい児の症状の個別性の強さ”は、養護教諭が疾患や成育歴等を把握しているため、それを共有して変化する子どものケアに当たる。個々の子どもによって、体調のよい時期は違う。発作が少ない、入院回数が少ない、よく授業に参加できていたなど、後になって気がつくことがある。その子のよい状態のピークがあるであった。

“子どもの身体状況の変化を把握する連携の必要性”は、呼吸器を装着している子どもに看護師は密にかかわるため、情報を得やすいが、重症児ではない場合は教員がケアするために情報が得にくいので、連携を必要とするなどであった。

“担任教員と看護師の情報共有の工夫”は、看護師が気づいた点を教員に伝えるが、教えられるのを嫌がる人がある。否定的な意見は言わないようにしている。よりよいケアの提案時には、「こうすれば授業が上手く受けられる」などの言い方にしているであった。

“母親に子どもの変化を理解しやすくする支援の工夫”は、子どもの状況が徐々に変化し悪くなっているにもかかわらず、親はその現実をどこまで理解できているのか、学校に登校させたいという思いが強い。看護師としては通学に不安を感じるがよくある。中学部になると、年齢を重ねていくと身体的な変化(低下)を認めながら母親が多いと感じる。主治医に説明してもらうこともあるなどであった。

看護師は、教員とは異なる目線であることを前提に、対応する必要があり、やはり看護師としてのアイデンティティの回復が学校看護師として、教員と対等に連携していける要と考えられる。

3) 支援プログラムの検討

これまでの結果、学校看護師は、重症児の病態やアセスメントなど、障がい児看護に関する専門的知識や技術に確信が持てていないことが明らかであった。そのため支援プログラムには、重度障害児の特徴を踏まえて、個々の障がい児の病態や個別性のアセスメントに焦点を当てる講義を組み込むことが重要と考えられた。

もうひとつには、学校看護師として役割取得を促進できる内容として、「看護師同士の交流の場」を設ける必要性が確認できた。それは気軽ではあるが、単なるサロンではなく、

建設的な討論ができる場の設定が必要であった。また 医療依存度の高い子どもに関する講義を合わせることであった。午前講義、午後討論ができる参加者での話し合いを設定することにした。さらに初任期中で希望

する者には実技を組み入れることにした。

<研修会の計画と実施>

○第1回目の研修会

テーマ：学校での看護の判断力

講義タイトル：難治性てんかん

～けいれんのアセスメント～

内容は、けいれんからてんかんになるメカニズム、事例をあげての難治性てんかんの症状の説明と治療などであった。

講師：小児科医師

参加者での話し合い

テーマ：緊急時の判断&情報交換会

参加者の各府県の特徴について代表者の説明、その後、グループでテーマに沿いながらも自由な話し合いとした。内容は普段の学校で感じていることを出し合ったり、問題と思っていることへの助言を求めたり、判断で悩んでいる内容や教員との上手な付き合い方や他校での状況の意見交換となった。

参加は、2府2県の特別支援学校に勤務する学校看護師24人、養護教諭1人であった。

評価アンケートでは、てんかん発作の本を読んで理解できなかったが、講義を聞いて整理できた。てんかんのことがよく分かったこと、現在困っていることの答えが見つかったこと、情報交換会で同じ立場でも話ができて有意義であった意見が多かった。

○第2回目の研修会

テーマ：変化する子どもの体調のアセスメント

講義タイトル：在宅重心児へのケアと家族支援

内容は、重症児の家庭での様子、在宅での呼吸管理、症状マネジメント、年齢とともに変化する体調、二次障害と対応、および養育者への説明や仲間づくりについての内容であった。

講師：家族支援専門看護師

家族支援専門看護師を起用した意図は、1つには、在宅での子どもの呼吸管理や症状マネジメント、保護者への対応の理解の促進、2つめには、訪問学級の児童生徒の様子を理解し、訪問教育をしている担任教員との連携がしやすくなることを目的とした。

実技：医療的ケアモデルシュミレーターを用いての実技 内容は、経管チューブの挿入、胃瘻ボタン、気管切開カフの挿入とした。

参加者での話し合い

テーマ：

「子どもの成長・発達に応じてケア・アセスメントをどう変化させているか」とした。

成長と共に身体の変化が大きく二次障害を起こす可能性のある状況を看護指導に理解しあうことを目的としてテーマの設定を行った。

アンケートでは、大変満足度は高く、次回の研修へも全員が参加を希望した。在宅の子どもの様子の理解につながったと考えられる。参加者は、2府2県の特別支援学校に勤務する学校看護師 42 人であった。養護教諭も3人参加していた。

本研究では、参加しやすいように1日の研修プログラムを計画・実施した。しかし、参加者は、技術訓練とともに、普段の疑問を仲間同士話し合う機会も必要と希望が強かったので、2日間連続あるいは、2種類を別日程の積み重ねにするなど、ニーズに即して種類を設ける必要があると思われる。

ここ1・2年教育委員会主催で研修会を始めた自治体も増えてきたので、支援プログラム計画への支援はもちろんのこと、看護系大学との協働が有効であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

Kokabu H., Tomari Y., Tsushima H. Practice of the school nurse responsible of medical care for special needs school children in Japan. ICN 8th APNN/International Nurse Practitioner Conference. (Helsinki:2014)

Kokabu H., Tsushima H., Y. Tomari. Nursing that supports the learning activities of children requiring medical care in special needs schools in Japan. 2015 IASSIDD AMERICAS REGIONAL CONGRESS. (Honolulu:2015)

Y. Yuko, J. Takamura, A. Yamasaki. The Difficulty the School Nurses Have in Providing Care to the Children Highly-Dependent on Medical Care. 14th Annual Asian American Pacific Islander Nurses Association Conference. (Honolulu:2017)

6. 研究組織

(1)研究代表者

泊 祐子 (TOMARI Yuko)
大阪医科大学・看護学部・教授
研究者番号：60197910

(2)研究分担者

竹村 淳子 (TAKEMURA Junko)
大阪医科大学・看護学部・准教授
研究者番号：00594269

古株ひろみ (KOKABU Hiromi)
滋賀県立大学・人間看護学部・教授
研究者番号：80259390

(3)連携研究者

津島ひろ江 (TSUSHIMA Hiroe)
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：80113364

(4)研究協力者

山崎 歩 (YAMASAKI Ayumi)
大阪医科大学・大学院看護学研究科・学生